

講演会・シンポジウム報告

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2021 年度講演会

連続講演会「タスクに基づく言語教育の理論と実践」
第四回講演会「TBLT (Task-Based Language Teaching) の
これまでとこれから—TBLT 実践の際に心に留めておきたいこと—」

日時：2022 年 3 月 13 日 (日) 14:00-16:00

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：208 名

講師：百濟 正和 氏 (関西国際大学国際コミュニケーション学部教授)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

本講演では、TBLT の理論と実践のこれまでの流れを振り返り、これからの TBLT 実践の際に心に留めておくことを参加者の皆さんと考えたいと思います。TBLT は英国で生まれた CLT (Communicative Language Teaching) の後継モデルであると考えられる研究者、教育実践者は少なくありません。しかし、日本の第二言語教育 (主に日本語教育と英語教育) において CLT がきちんと議論されず、SLA 研究の潮流に乗り注目された経緯があります。本講演ではまず英国で始まった CLT とはどのようなムーブメントだったのかについて振り返ります。

TBLT は先に述べたように、SLA 研究の発展とともに注目を集めました。教育学からの知見が見過ごされることが多いようです。しかし教育実践に携わるのであれば、教育学が TBLT に与える知見を知ることで、それぞれの実践を深めるきっかけになります。本講演では、教育学が TBLT に与える知見について整理します。それらの知見は、それぞれの言語教育実践を深める際のヒントを与えてくれるはずです。

〈報告〉

この講演は、連続講演会「タスクに基づく言語教育の理論と実践」の最終回として開催したものである。まず TBLT (Task-Based Language Teaching) と関連づけて語られることの多い、CLT (Communicative Language Teaching) とはどのようなムーブメントだったのかについて振り返っていただいた。講演の後半では、教育学が TBLT に与える知見を知ることによって、教育実践をいかに深め得るかをお話しいただいた。それは、例えば、単に言語の練習活動としてタスクを作成し、学習者に取り組みせるのではなく、なぜそのタスクを行うかという真正性があることを大事にするということである。教室を、教室の外に出るための練習をする擬似的なコミュニケーションの場と捉えず、クラスメート同士や教師との間で真にコミュニケーションが行われる場として捉えてタスクを開発・実施するといったことである。

本学の日本語教育課程では、この数年、特に初級・中級レベルの授業で TBLT を実践してきており、中でも中級レベルでは TBLT に基づく教科書の市販に向けて開発に取り組んできたこともあり、関係者にとって教育実践を振り返る大変良い機会となった。講演を伺って、自分たちの実践に対する自信を高めるとともに、さらに良い形で推進する上で考えるべきことを改めて意識させていただく機会となった。

ウクライナ危機から数週間経っても事態が悪化の一途を辿る時期の講演会開催となったが、言語教育に従事するものがどのように教育実践をすることが社会に生きる学習者らを豊かにし、彼らの人生を歩む支えになるかという観点が講演会後半で言及されていたのも多くの参加者の胸を打った。多くの言語教師にとってこれまでを振り返り、明日からの実践を見つめ直す機会になったと言えるだろう。

(文責：小澤伊久美)

連続講演会・ワークショップ「第二言語学習における舞台芸術の役割」
The role of performing arts in second language learning
第三回講演会・ワークショップ
「言語教育における演劇手法・ドラマメソッド」

日時：2022 年 6 月 15 日 (水) 13:20-15:00

場所：国際基督教大学本館 213 教室

参加人数：35 名

講師：太田 雅一 氏 (MLS 社)、Julie Bracefield 氏 (MLS 社)

講演の概要

本講演・ワークショップは 2021 年度に実施した “The role of performing arts in second language learning” シリーズの 3 回目として延期になっていたものである。本講演・ワークショップの目的は、言語教育における演劇的手法の活用について理解を深め、学校教育にも応用するための可能性について発想を広げることにあった。演劇には非日常的なイメージがあるが、ドラマメソッドは通常の学校の授業に取り入れられ、単調になりがちな教科書の音読やロールプレイも、場面設定をより具体的にしたり、話者の声や人物像を変えたりすることで、英語を生きた言語として身に付けられる。コミュニケーション能力を身に付けるには、語彙と文法を学ぶだけでは不十分である。様々な場面・状況・相手によって表現を使い分ける語用論、個々の音韻の発音以外のイントネーションやリズムなどの超分節の特徴、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションの要素などは、実際に言語を使用することで獲得される。教室外で英語に触れる機会が少ない生徒たちには、ドラマメソッドは効果的である。また、ある人物を演じることで、相手の気持ちを理解しようとする心が生まれ、差別や偏見をなくすことにもつながる。

〈報告〉

本講演・ワークショップは 2021 年に予定されていたものだが、対面での実施を重視したため延期とし、新型コロナウイルス感染拡大の状況が少し落ち着いた時期を見計らい、2022 年春に実現の運びとなった。英語科教育法 III の授業の時間を利用して実施したが、授業履修者や関係者の 19 名以外に学内の教職員や学生が 16 名参加し、言語教育における演劇的手法への関心が高いことが窺われた。講演はレクチャーとワークショップの組み合わせの形式で構成されていた。ドラマメソッドを 50 年かけて作り上げた太田氏はその活動の歴史や考え方について解説をしたのち、検定教科書の内容を題材にした実践を体験することができた。Julie Bracefield 氏がファシリテーターとなり、体験を希望した 25 名程度の学生たちが順番に、様々な方法での演劇活動に参加した。短いやり取りではあったが、目を見て、相手の言葉に耳を傾けて復唱すること、場面や人数、内容に少しずつ変化を加えて復唱することなどを試みた。

講演及びワークショップを通して、演劇手法には、日本の学校における言語教育に不足している多くのヒントが含まれていることを実感することができた。言語教育を学ぶ多くの学生が様々なアイデアを実際に体験できたのは大きな収穫である。特に教職課程の学生たちにはインパクトがあり、卒論に演劇教育のテーマを選んだ学生もいる。今後、教育現場において何らかの形で活かされることを確信している。
(文責：藤井彰子・辻田麻里)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2022 年度連続講演会

連続講演会「デザインによる課題解決と未来展望」 第一回講演会「デザイン思考—デザインによる課題解決と イノベーション—」

日時：2022 年 5 月 8 日 (日) 14:30-16:30

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：212 名

講師：在家 加奈子 氏 (富士通株式会社デザインセンター)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

状況が目まぐるしく変化する現代、多種多様な関係者の想いが絡まり、ロジカルシンキングでは解決しにくい「やっかいな問題」を解決に導くヒントとして、デザイン思考が注目されています。その基本姿勢は「人起点」「多様性の尊重」「プロトを回す」です。

この講演では、デザイン思考の基礎知識から事例、初心者の方でも実践しやすい手法などをお伝えします。

〈報告〉

2021 年度に開催した連続講演会「ユニバーサルコミュニケーションデザイン」では、多文化・多言語社会における「わかりやすいコミュニケーション」を考えるために、インフォグラフィックス、ウェブデザイン、学びのユニバーサルデザイン、ユニバーサルコミュニケーションデザインといった言語教育以外の様々な領域の専門家を講師にお招きした。講師が共通して指摘されたことは、①情報をデザインするという観点、②わかりにくさを軽減するという考え方への発想の転換、そして、③ユーザー側の状況の分析の重要性であった。

一方、これらのことについて検討を続けた結果、多様な要因が複雑に絡む現場に対応するには、それらの点について検討するだけでは不十分で、包括的に問題を捉えること、当事者ですら意識していない真の問題を概念化することが必要であることがわかってきた。現代は、Volatility (変動性)・Uncertainty (不確実性)・Complexity (複雑性)・Ambiguity (曖昧性)という特性があるため、VUCA 時代とも呼ばれている。状況の変化が激しく、複雑な要因が絡み合っていて、モノゴトが曖昧で不確実で、そこでは、ロジカルシンキングでは解決しにくい困難な課題が多々ある。

そうした課題を解決に導く発想法として、近年、デザイン思考が注目されている。そこで今年度は、コミュニケーション上の課題を「デザインの力」でいかに解決できるかを考えることを目的に、「デザインによる課題解決と未来展望」と題する連続講演会を企画した。その初回にあたる本講演では、デザイン思考のわかりやすい事例から始まり、「人起点」「多様性の尊重」「プロトを回す」という基本の考えがそれぞれどのような意味でなぜ重要なかが紹介された。また、それを実践する手立てを、初心者でもできるレベルからお話いただいた。最後に、本講演を通してデザイン思考に関心を持った参加者が学び続けられるよう、参考文献なども紹介してくださった。

近年注目されているデザイン思考だが、関心を持ったばかりの参加者が学内外ともに多く、基礎から学んで実践していく良い機会となったようだ。特にビジネス以外の分野の方にとってデザイン思考を学ぶ場となったと考えられる。質疑応答では初心者からも実践経験者からも多くの質問が寄せられ、それぞれにとってさらなる一歩を踏み出すきっかけとなったと思われる。

(文責：小澤伊久美)

連続講演会「デザインによる課題解決と未来展望」
第二回講演会「UX デザインとユニバーサルデザイン
—Human Centered Design の理解へ向けて—」

日時：2022 年 5 月 14 日 (土) 14:00-16:10

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：120 名

講師：吉武 良治 氏 (芝浦工業大学デザイン工学部教授)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

「デザイン」というキーワードをよく目にするようになりました。デザイン思考やアート思考、ユーザーエクスペリエンスデザイン (UX デザイン) や人間中心設計など、いろいろな言葉で表現されますが、すべてほぼ同じ目標へ向かうものです。またユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインなども大切なコンセプトとして社会に定着してきました。これらについて UX デザインを中心に解説し、「デザイン」をお仕事や生活に取り入れていくヒントをお伝えします。

〈報告〉

本講演では、冒頭に、デザインの定義、近年デザインに注目が集まる理由、デザイン工学の紹介があり、機能・性能重視からユーザー体験重視へとデザインの動向が移ってきており、今は体験価値が重視されているが、それを提供するために技術価値を設計することも忘れてはならないというお話があった。

講師によれば UX (ユーザー体験) デザインとは「ユーザーが体験するものすべてを考慮して、トータルにデザインすること」であり、利用の状況 (タスク/シーン) と対象ユーザー (ペルソナ) とシナリオの 3 つが含まれる。ユーザビリティは「ユーザー、利用状況、目的など」により変化するため、この 3 つの尺度で測定すること、不具合がある状態から問題点を改善することで UX 体験は向上するが、それでも「違和感なく使える」ことでユーザビリティはゼロレベルになるだけであること、さらによりよいユーザー体験や魅力的な品質をあげるための取り組みも重要であることが指摘された。

次に、インタラクティブシステムを対象とした Human Centered Design (HCD) は ISO や JIS などの規格にもなっており、JIS 規格によれば「システムの使い方に焦点を当て、人間工学 (ユーザビリティを含む) の知識と技術を適用することによって、インタラクティブシステムをより使いやすくすることを目的とするシステム設計と開発へのアプローチ」とされているという解説があった。また、HCD は解決案の可視化とその評価の繰り返しのプロセスであるとし、その手法の 1 つとしてペルソナ法のご紹介があった。

最後にユニバーサルデザイン、インクルーシブデザインなどにも言及しつつ、「デザイン」を仕事や日常生活に取り入れていくヒントを示してくださった。特に印象に残ったのはユニバーサルデザインを推進する上での留意点である。はじめて取り組む際、全員にとって良いデザインを最初から追求しがちだが、まずは一人のユーザーにとって 200% の良い体験をデザインし、それが誰かの不具合をもたらす場合にはその改善に取り組むべきであり、その意味でもまずユーザーに関して調査すべきだということであった。

UX デザインや HCD は、授業や学生対応などの領域で言及されることはほとんどないが、その有用性がわかり、推進に際して必要な基礎知識や学び方を教えていただけた講演会であった。

(文責：小澤伊久美)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2022 年度連続講演会

連続講演会「デザインによる課題解決と未来展望」 第三回講演会「学び × デザイン × 授業」

日時：2022 年 6 月 11 日 (土) 10:00-16:10

場所：国際基督教大学本館 315 教室

参加人数：12 名

講師：川俣 智路 氏 (北海道教育大学大学院教育学研究科准教授)

阿部 利彦 氏 (星槎大学大学院教育実践研究科教授)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

この連続講演会では、よりよい未来をつくるための課題解決の在り方を「デザイン」をキーワードに考えてきました。今回は「学び」や「授業」に焦点をあてて「デザイン」によって何ができるかを考えたいと思います。

〈報告〉

本講演会はお二人の講師をお招きした。オンラインでは伺いにくい話題もあり、対面で開催したが、コロナ感染拡大予防のため参加者を学内の者に限定した。スケジュール調整が難しく、学期末試験直前の週末の開催となったことから参加人数は少なかったが、熱心な質問や討論が続いた一日となった。

午前は「学びのユニバーサルデザインで学びを舵とることができる学生を育てよう」と題し、米国 CAST が提唱する「自分の学びの舵をとれる学習者を育てる学習環境デザイン」の理論的枠組みである学びのユニバーサルデザイン (Universal Design for Learning : UDL) について川俣氏に解説していただいた。講師の実践が例示されるなど初学者にもわかりやすいご説明があった他、UDL 導入は学生の多様なニーズへの対応だけに着目するのではなく、学び手自身が主体的な学びのエキスパートになり、今よりもっと学ぶことが楽しめるようになる学習者を社会に送り出すことを目指すことが重要であるというお話があった。

午後は「学びのつまずきを想定した教育のユニバーサルデザイン」という題で、学びにおけるつまずきを理解し、ユニバーサルデザインの視点を授業に取り入れるための考え方を阿部氏にお話いただいた。冒頭、ユニバーサルデザインの核となる「利用する人の視点から考え、できるだけ多くの人が利用可能になるように初めからデザインすること」という概念について解説があった。この概念を授業に適用する場合、学び手の視点から考えること、また、「できるだけ多く」であって「全ての人」ではないこと、最初から工夫できることは工夫し、そのためにどのような観点が有効かということが入門者にもわかりやすい形でご説明があった。重要な観点として焦点化・視覚化・共有可の 3 点が紹介され、学び手への問いかけを工夫することで注意喚起・関連づけをしていくことなど授業に活かせるヒントを丁寧に解説してくださった。

お二人のご講演に続く全体討議では、このようなユニバーサルデザインを学び・授業で展開するにあたって、どのような困難があるかについて意見交換がなされた。講師からは、教え手自身がまずは楽しめることから着手していくと良いこと、周囲の教育者らにこの考えを押しつけることがかえって阻害要因を生じる可能性があること、まずは関心がある人たちの間でこうした取り組みを進めていくことが必要だというお話があり、参加者の動機が高まったことが感じられる講演会であった。(文責：小澤伊久美)

連続講演会「デザインによる課題解決と未来展望」 第四回講演会「サクセスケースメソッドの適用による研修評価」

日時：2022 年 11 月 28 日 (月) 10:00-12:00

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：63 名

講師：佐々木 亮 氏 (国際開発センター評価部主任研究員)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

アメリカの企業内研修評価ではロバート・O・プリンカーホフによる『サクセスケースメソッド：何がうまくいっていて、何がうまくいっていないのかを素早く把握する』がベストセラーになっています。サクセスケースメソッド (SCM) とは、組織の新しい取り組みがどれだけうまくいっているかを素早く知るために、慎重に作られたシンプルで実証された方法です。

本講演会では、この書籍の邦訳を 2022 年 1 月に翻訳出版された佐々木亮先生を講師にお招きし、サクセスケースメソッドを適用した研修評価についてご講演いただきます。

〈報告〉

本講演では研修の成果を高めるために、いかに評価を活用するかという観点から、サクセスケースメソッドについて解説していただいた。

講師の佐々木氏は、まず、研修評価の基礎知識として、研修評価の歴史的な流れをお話しくださった。1975 年にカークパトリックが提唱し、広く普及した 4 段階モデルや、厳格な評価デザインとして知られているランダム化比較実験 (RCT: Randomized Controlled Trial) の特徴を説明した上で、これは研修参加者の全員を平均的に伸ばすという発想に基づいていることを指摘された。

これに対して、昨今では、サクセスケースメソッド (SCM) と呼ばれる方法が、アマゾンなどの民間企業や世界銀行、スタンフォード大学などで採用されているが、これは、全数調査により、うまくいったケースを見つけ出し、それを深掘りして分析することで成功例を増やすという発想に基づいているというお話があった。SCM は数量的な統計分析と濃密なストーリーテリングを効果的に組み合わせた手法であり、適度な厳密さと正確さを持ちながら、比較的安価で迅速に、何がうまくいっていて、何がうまくいっていないのかを把握できるという特徴があるとのことだった。佐々木氏は、アフリカ・タンザニアでの公務員研修のサクセスケースメソッド評価を例に具体的に SCM を紹介してくださった。

質疑応答の時間には、参加者からは SCM についてだけでなく、統計的分析やリサーチデザイン、インタビュー調査の留意点など様々な観点から熱心な質問が続き、講師はそれに丁寧に答えてくださった。また、ご講演の中で、事例研究が台頭した歴史的経緯について取り上げてくださったことを踏まえ、アカデミズムの中での事例研究に対する否定的評価をいかに覆すべきかという質問があった。佐々木氏はこれに対して、先行研究を論じる中で、統計的手法や事例研究の歴史を取り上げるのが有効であろうと回答された。本講演は研修評価のみならず統計的分析や事例研究についても示唆の多いものとなった。

(文責：小澤伊久美)

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2022 年度連続講演会

連続講演会「デザインによる課題解決と未来展望」 第五回講演会「教育・学修支援を支える教学デザイン・組織デザイン」

日時：2022 年 12 月 2 日 (金) 10:00-12:00

形式：Zoom によるオンライン開催

参加人数：57 名

講師：杉森 公一 氏 (北陸大学高等教育推進センター教授・センター長)

講演の概要 (公示用ポスターより抜粋)

教育・学修を支える教学デザインには、3つのレベルがある。全学レベル (マクロ)、学位プログラムレベル (ミドル)、授業レベル (ミクロ)、それぞれ検証する対象・方法が異なっている。

マクロレベル・ミドルレベルでの授業科目とディプロマポリシーの連関図 (カリキュラム・マップ)、ミクロレベルでの学修プロセス評価 (学修ポートフォリオ) の間には隔たりが生じることがある。

学生ひとりひとりの達成度把握と履修助言を実現するアカデミック・アドバイジングを機能させる組織デザインを行なっていくために、どのようなことに気をつけていけばよいのか考えるきっかけとしたい。

〈報告〉

大学で教育・学修を支えている教職員は、それぞれの現場で密に関わるレベルが異なっていることが多く、そこだけを見ていると、マクロレベル・ミドルレベルでの授業科目とディプロマポリシーの連関図 (カリキュラム・マップ)、ミクロレベルでの学修プロセス評価 (学修ポートフォリオ) の間などで、隔たりが生じてしまい、全体としてうまく機能しないということが考えられる。本講演では、そうした点についても丁寧に説明がなされた上で、学生ひとりひとりの達成度把握と履修助言を実現するアカデミック・アドバイジングを機能させる組織デザインを行なっていくために、気をつけるべきことをお話くださった。

印象的だったのは、先行研究や、杉森氏のこれまでの実践や研究が数多く紹介された点である。例えば、何を学生の学修成果 (ラーニング・アウトカム) として捉えるのかに関連し、学習と学修の違いやコンピテンシーの定義、入学・環境・卒業 I-E-O モデルや鳥瞰図モデル、ダニング＝クルーガー効果が紹介された。その上で、量的・質的調査を組み合わせた形で妥当性を検証しリサーチ・クエスチョンを形成することが必要だが、その担い手や支援組織が欠如しているという課題があること、その困難を乗り越え、いかにマクロとミクロをつなぐ実装 (開発) を行ってきたかが具体的に説明された。北陸大学の実践だけでなく、前職の金沢大学での AP 事業などの実践も含め、いかに実装を探索的に進め、発展させてきたかのお話があった。

金沢大学では、3つのポリシー (DP・CP・AP) の実現を学修環境面から支えるバックアップ・ポリシー (BP) を定めており、学修支援、キャリア形成支援、ヘルスケア支援、障がい学生支援、性的マイノリティ支援があり、これらの支援に携わる教職員や支援学生スタッフ等を含むすべての支援担当者が持続可能で質の高い活動を行うことを支援することを宣言している。こうした宣言を出すに至るには、そして宣言通りの環境を実現するにはミクロとマクロをつなぎ、教職員と学生の学びの場づくりの結び目となり、組織を紐帯する変革の担い手 (Change Agent) が必要である。杉森氏は、ご自分がそれをいかに実践されたかをいくつかのパターンに分けて紹介された。本講演会は、参加者に、このようなことが実現できるならば私もやってみよう、第一歩を踏み出そうという気持ちにさせるものであったと言えるだろう。(文責：小澤伊久美)